



—昭和大学歯科病院の理念—

患者本位の医療
先進医療の推進
良き歯科医師の育成

発行責任者 病院長 岡野 友宏
編集責任者 広報委員長 高橋 浩二
〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1
TEL 03-3787-1151(代表)

ホームページ: <http://www10.showa-u.ac.jp/~denthp/index.html>

より低侵襲に. できるだけ短い入院期間のために.

口腔外科 科長 新谷 悟

「歯科で入院？」と思われる方もいらっしゃるかも知れませんが、歯科口腔外科の診療領域の対象は、「原則として口唇、頬粘膜、上下歯槽、硬口蓋、舌前3分の2、口腔底に、軟口蓋、顎骨（顎関節を含む）、唾液腺（耳下腺を除く）を加える部位」であり、分かりやすく言うと「顎と口の中の病気に対応する」ということになります。そのなかで、「抜歯、特に難しい抜歯や埋まっている歯の抜歯、顎や口の中にできた袋やできもの（腫瘍）を手術して治す」のが口腔外科です。

私は臨床の現場で若い先生に常々、「患者さんには自分がされたい治療をするように」と言っています。そして「すべては患者さんのために」とも。外科は手術してその患者さんの病気を治します。その時に患者さんの体に侵襲を加えるわけですが、その侵襲はできるだけ少ないほうがよいのは当たり前のことです。如何に患者さんへの侵襲を少なくするのか、そして病気をきちんと治すのかといったことが外科医の使命です。

外科における手術術式はほぼ確立しており、大きく変化するものではありません。ですから「低侵襲治療」を行うためには日々の手術をいかに心を込めて丁寧に行うかということに加え、常に何らかの工夫を考えている必要があります。我々、昭和大学歯科病院口腔外科では、【内視鏡と特殊な機器を用いて、従来は抜かないといけなかった歯を温存する手術】や【病気のために、本来は切り取らないといけない顎の骨を何回か繰り返し病気

の部分だけを手術することで温存する手術】、さらには【どうしても切り取らないといけない顎の骨を温熱処理し、もう一度再利用して見た目では手術したことがわからないようにするといった

低侵襲手術】を全国に先駆けて行っており、新聞や雑誌などで取り上げられる様になりました。

低侵襲の治療は早期の退院につながります。私は約6年前に愛媛大学医学部より転任してまいりましたが、その時に感じたことは、「東京の患者さんはお仕事の都合やご家庭の都合でできるだけ入院期間を短くして差し上げないといけない。」ということでした。そのためには、外科の侵襲を本当に少なくするしかないのです。ほかの病院で10日入院が必要ならば私どもの病院では7日でよいようにしよう。ただ、そのことで患者さんに逆に迷惑がかかることがあってはいけません。そのためにも必要だったのが低侵襲治療です。「すべては患者さんのために」をモットーにこれからも日々の臨床に医局員ともども励みたいと思います。

「いかに患者さんを思い、できるだけ丁寧な患者さんの身になった侵襲度の低い外科手術を行うことができるか」を考えながら、「より良い治療」を提供していきたいお思います。よろしくお願ひ申し上げます。



口腔外科 紹介

私たちの口腔外科は、口腔(口の中)、顎、顔面ならびにその周囲組織に生じた病気を取り扱う診療科です。

口腔外科で対象とする疾患には、智歯(親知らず)周囲炎、虫歯や歯周病が進行して起こる顎骨炎・蜂窩織炎、嚢胞(膿の袋)性病変、口腔粘膜疾患(口の中の粘膜にできる様々な病気)、腫瘍(悪性・良性)、口蓋裂・口唇裂、顎関節症、骨折などの顎顔面外傷、顎変形症、インプラント(人工歯根)治療などがあります。

また、今年からチーム医療を核とした口腔がんセンターが、開設されより専門性の高い治療を歯科病院のチーム医療として展開していくことになりました。国内でも有数のレベルの高い治療が受けられます。

口(口腔)は「食べる」ための消化管で、全身疾患の症状が目に見えて現れやすいところでもあり、歯や口だけの「歯学知識」だけでなく「医学知識」を兼ね備え診療にあたっています。また、以下のような先進医療への取り組みを行っています。

1. 低侵襲治療:超音波骨切削機器を使用して抜歯や顎骨の病気に対する手術を行うことにより術後の神経障害や出血を最小にとどめることができます。さらに、硬性内視鏡の応用で、最小の口腔内切開、骨削除量で対応できる手術が広がりました。また、超音波骨切削と硬性内視鏡により、今まで保存できなかった歯が保存出来るようになり飛躍的な低侵襲手術が可能となっています。

2. 口腔癌への取り組み(免疫療法・サイバーナイフ・PET-CT検査):東京大学医科学研究所と連携し、口腔癌に対する樹状細胞による免疫療法を行うとともに、サイバーナイフ療法も連携医療機関とともに行い、低侵襲な放射線治療を行うとともに、口腔癌のリンパ節や全身への転移などをいち早く発見するためにPET-CT検査を導入しております。

3. 口腔インプラントへの取り組み(高度先進医療):口腔がんや顎の骨の腫瘍、唇顎口蓋裂などのために生じた顎骨を含む歯の欠損に対しての口腔インプラント治療が、今年度より保険導入されました。インプラント治療は保険外の自費診療で高額であったものが、一般の保険診療でできるようになりました。ただし、この治療は昭和大学歯科病院などの限られた施設でのみ認められた治療であり、一般の歯科診療所では保険適法にはなりませんのでご注意ください。

外来・入院診療の実績

2011年度の外来新患者数は5,170名で、2011年度の再来患者数は42,838名でした。入院実績では、延べ入院患者数は596名、その内訳としては、口腔がんや口の悪性腫瘍、良性腫瘍(口の中のできもの)、嚢胞(顎の中にできる風船のような病気)、顎変形症(受け口や出っ歯、顎がゆがんでいるなど)、口唇裂・口蓋裂、骨折などの外傷、インプラント関連外科手術、顎関節の手術などでした。

認定医など:日本口腔外科学会指導医・専門医、日本がん治療認定医機構・暫定教育医、国際インプラント学会・指導医、歯科薬物療法学会・認定臨床治験担当者、インフェクションコントロールドクター、日本顎顔面インプラント学会・指導医、日本歯科間ドック学会・認定医。

口腔外科 科長 新谷 悟



外来の診療風景



病棟カンファレンス

近年アレルギー症状を訴える患者は増加傾向にあり、国民の約3割が何らかのアレルゲンを持っているといわれています。

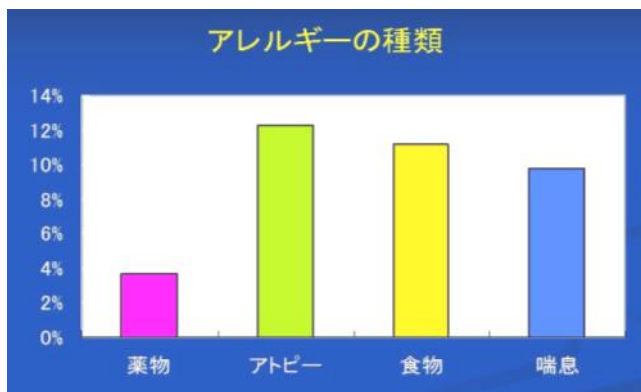
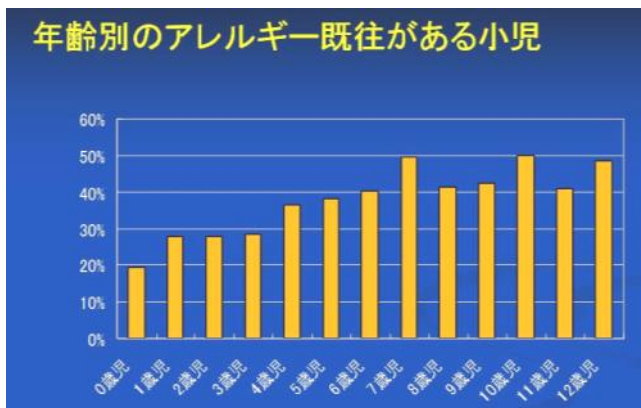
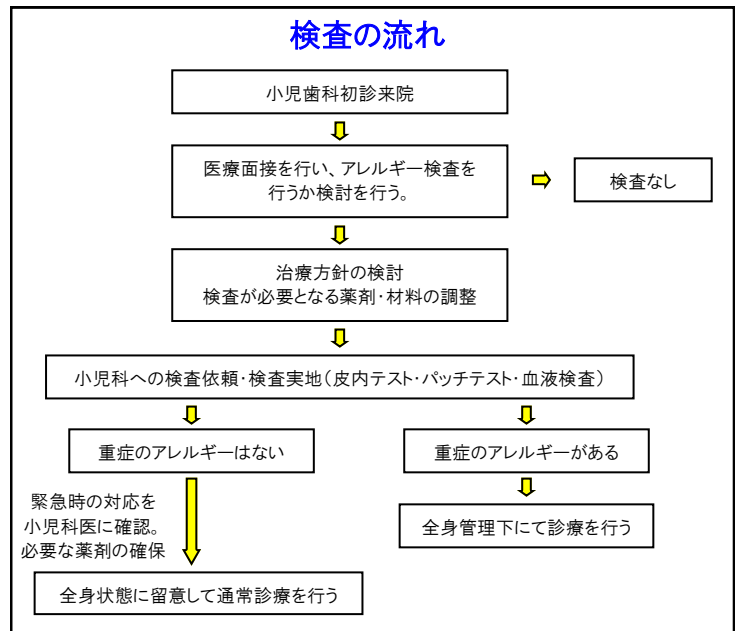
当科の患者さんの中にも歯科治療のあとに発疹がでてしまったり、かゆみがでてしまったりとさまざまな症状を抱えていらっしゃる患者さんが多くみられます。大部分の患者さんは歯科治療が原因で症状がでていたわけではないことが多いのですが、中にはわずかですが歯科の薬剤や材料、すなわちお口の中の歯科用金属や治療用の材料・薬品などが原因で、いろいろなアレルギー疾患を引き起こす方がいらっしゃいます。

現在、当科では歯科に対するアレルギーが疑われる小児患者さんに対して、小児科の医師と連携をとり歯科材料・歯科薬剤に対するアレルギー検査を行っています。

たほうがよい材料や薬剤が判明する場合も多く、有用です。また、アレルギー検査の結果に関しては、保護者だけではなく学校や、必要があれば年齢に応じて子ども自身にも説明を行い、自己管理ができるよう指導を行っております。もちろん実際に治療を行う際には、検査の結果をもとに使用を控えたほうがよい材料や薬剤を極力使用せず行っております。

アレルギーがあるということでもなかなか治療にふみきれない、今までアレルギーかもしれないと思っていた、などいろいろな原因で歯科から遠ざかってしまっていたことも多いと思いますが、まずはお気軽にご相談ください。

検査の流れ



アレルギー検査としては、パッチテスト(背中などに歯科材料を貼付)や皮内テスト(皮内に少量注入)などを行います。もちろんすべてのアレルギーが完全に判明するわけではありませんが、使用を控え



皮内テスト



小児科でのパッチテスト

地域連携医療の推進(昭和大学口腔ケアセンター城南地域連携協議会)

第3回昭和大学口腔ケアセンター城南地域連携協議会が5月16日に8歯科医師会(荏原歯科医師会、品川歯科医師会、大森歯科医師会、蒲田歯科医師会、目黒区歯科医師会、世田谷区歯科医師会、玉川歯科医師会、川崎市歯科医師会)の協議会委員の皆様と昭和大学病院、昭和大学歯科病院の口腔ケアセンター実務者委員の皆さまの参加を得て、学部長、歯科病院長、両副病院長も出席いただいて、旗の台キャンパス1号館5階会議室で開催されました。この協議会は「口腔の医療面から地域における連携医療について検討する」ことを目的にして平成22年12月に発足した協議会です。

今回の協議会では、本年の4月の医療保険改正により歯科の重点項目として周術期の口腔機能管理が保険導入されました。これを受けて昭和大学の各附属病院内の歯科・口腔ケアセンターと外科系の各診療科との連携も一層密になり、患者さん中心のチーム医療が飛躍的に進められてきています。周術期の口腔機能管理は、退院後の地域の歯科医院との病診連携が必要とされています。会議の中心は、このがん等の周術期の患者さんに対する病診の地域連携として、昭和大学口腔ケアセンター城南地域連携協議会の各歯科医師会への連携歯科医療システムの早急な構築が協議されました。患者さんを通じた地域の歯科診療所とのスムーズな連携システムの構築は大きな協議事項でしたが、その歯科診療所に対する昭和大学歯科病院の支援のあり方についても話し合われました。地域の中核病院としての昭和大学歯科病院の果たす役割はますます重要となることが求められています。

今回の周術期の口腔機能管理を昭和大学口

腔ケアセンター全体で見ると、このような既存の連携協議会(他に昭和大学口腔ケアセンター横浜市北部連携協議会)や、各病院の歯科独自の地域連携も新たに作られ、昭和大学の各附属病院の歯科と口腔ケアセンターを主体とし、昭和大学歯科病院の地域連携歯科との連携のもとに、地域歯科医院との病診連携が加速度的に進められている現状にあります。慢性疾患や癌などの周術期を経験する患者さんを含めて、医科歯科連携した歯・口に対する質の高い歯科医療が求められるなかで、今回の周術期の口腔機能管理はこれまで培ってきた「昭和大学のチーム医療」教育と患者中心のシームレスケアの具現化として大いに期待できるものと考えられます。

超高齢社会のこれからの歯科医療は、医科歯科連携、病診連携が進められなくては多くの患者さんに対応できない疾病構造となることは容易に想像でき、急性期から終末期までの医療体制は医科歯科連携のチーム医療なしでは考えられません。チーム医療、地域連携医療、ともに昭和大学が教育と臨床の世界のフロントランナーであります。これからの歯科医療を担う歯科医師の養成や質の高い歯科医療の提供拠点として、昭和大学、昭和大学歯科病院に対する社会の期待は極めて大きいと感じさせられ、第3回の地域連携協議会が閉会となりました。

(昭和大学口腔ケアセンター長 向井 美恵)



編集後記

先月21日の金環日食に引き続き、6月6日には21世紀では最後の「金星の太陽面通過」という天体ショーがありました。マスコミは日食用の遮光板なしで太陽を見ると目に障害が起こる危険性について繰り返し報道していました。生命の源の太陽も直接見ると危険なことから、百薬の長のお酒も高濃度アルコールを直接飲むと危険だよとか連想してしまうのは百薬の長をよく嗜む私だけでしょうか。。

なにはともあれ明眸皓齒(めいぼうこうし)、目も大切ですが、白く輝く歯も大切にしましょう。(K.T)